
江戸小唄 越後屋

南 多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江戸小噺 越後屋

【Nコード】

N1268T

【作者名】

南 多聞

【あらすじ】

時は江戸時代、「越後屋お主も悪よのう」「いえ、お代官様こそ」の有名な時代劇台詞で展開するショートストーリー！。

第1話 越後屋お主も悪よのう

今日もお運び頂きありがとうございます、

よく時代劇をテレビで観てますてえーと、よく出てくる台詞がござ
いますね、

『越後屋おぬしも悪よのう』『お代官様こそ』

この越後屋ももとは三越が江戸時代の屋号で御座いまして、創始
者の三井家は伊勢商人でございます。伊勢商人、近江商人は正直な
商売を心がける商人の鑑でございますよ。それが何故悪徳商人の代
名詞の様に時代劇で使われる様になったのかは定かではございませ
んが、歌舞伎の役者には屋号がございます、市川家ですと成田屋、
尾上家なら音羽屋と申します。

歌舞伎は悪の世界を描く演出が多ございます、代表格は白浪五人男
でございますね。この主人公は盗賊集団でございます、役者が見得
を切る時、観客は『ヨッ 音羽屋』と掛け声を掛けます。そんな事
から越後屋の誤解されたレッテルが付いたのでございましょうかね。

江戸時代の初期、初代金山奉行に大久保長安という名の奉行がいま
した、元々の出自は金鉾職人でございまして、言ってみれば山師で
ございます。何せ金鉾捜しの名人で御座いますから家康は武士の身
分に取り立て奉行職を命じます。この頃の幕府は今で言う公共工事
は許可を与えるだけで幕府はお金を出さないんでございましてね、
それから得られる利益を上納させたのでございますよ。このように
金回りのいい奉行に対し、文治派の家老本多正信は面白くありませ
ん、家康に長安は上納分を横領しているとか讒言したのでございま
す。

そこで家康『長安は山師ゆえ疚しい事は無い』と、言ったので御座
いますね。家康、懐の大きい人物でございますから、ここで罰して
上納金が無くなるより、目を瞑っていた方が得と正信の意見を容め

るのでございます。

確かに産出した金の分け前は長安六分、幕府四分でございますが、掛かる費用は長安持ちとなつて御座いますので実質は五分五分と云つたところで御座いましょう、ところが長安この時代でアマルガム法といった精錬技術を使いまして効率よく金を取り出したので御座いますね。その事もあつて江戸時代は金の生産世界一で御座いましたのですよ。尚且つ金堀職人は当時皆様ご存知の通り、罪人を使いましたから人件費はタダですから長安はウハウハでございますね、それでも人手不足で御座いますから一般募集も致します。ところが長安遊郭も経営し、職人を遊ばせて賃金を吸い上げてしまうので御座います。本多はますます面白くありません、最後に家康は長安死後に財産全部取上げたので御座います。

佐渡の金山の話でございますから『越後屋お主も悪よのう』と取上げられたので御座いましょうね。

江戸時代、許可を取るため菓子折りの底に小判を入れるのは商慣習と見たほうが正しいのでございます。

賄賂は寧ろ武士間の方が多御座いまして、配下の犯罪のもみ消し、役職を得るため幕府の重鎮への贈賄が当たり前に行っていたので御座います。

第2話 この世の花（前書き）

時は江戸時代 燃え尽きる事のない薪の作業所を寒村に建設のため、
武士が寒村にやってきます。

第2話 この世の花

年中この世の花を咲かせようとした男の話でございます。

その男の名は東原伝衛門と申し、ある半農半漁の寒村八開村にやつて参りました。村の名主弥平の家を訪れます、名主といっても寒村の事60坪ほどの藁葺き屋根の家でございます。伝衛門は弥平の入りの障子戸を開けますと、土間で莫蔭もくえんに座り縄を編んでいる男に言います

「ごめん、八開村の名主弥平殿の宅はこちらでござろうか」

「どなたでござりましょうか、弥平は手前でござります」

「某それがしは東原伝右衛門と申す、江戸から老中様の命を受けてまいった」
「そのような偉い方が、この様なむさ苦しい所に何んでござりましたよう」

「この場所で燃え尽きる事のない薪を作るのでござる」

「そのような薪があるんでございましたら、何もこの様な辺鄙な所でなく、江戸にお造りされたら、よございましょうに」

「いやいや江戸も今は人が多くてな、場所が無いのでござる」

「如何ほどの場所が要りようでございましょうか」

「海辺からこの村の半分は要りますかな」

「それでは、この村人の行く所も、生業なりわいの田畑が無くなってしまします」

「その心配は無用でござる、田畑を失うた村の衆は薪の作業場で役を負うてくれれば良い」

「そのような話は、村の衆に諮ってからでないと一存ではご返答しかねます」

「さもあるう、また改めて伺うとしよう、もし村の衆の寄り合いには、この渡井庄兵を代官所に留め置くゆえ同席させようぞ本日はこれにて失礼つかまつる」

同行していた渡井庄兵を紹介致します。

「渡井庄兵と申します、以後何なりとご相談下され」

庄兵は武士ではなく商人でございませう、白髪あきんどの丁髷に丸顔の額には三本の皺があり、腰が低いわりに鋭い眼光をしております。

第3話 燃え尽きる事のない薪（前書き）

八開村の農民は代官所に集まります。

第3話 燃え尽きる事のない薪

弥平は村の衆を集めまして代官屋敷で会合を開くのであります。

村人は庭の玉砂利の上、弥平を先頭に30人程が座り廊下奥の正面座敷に村の代官福井重蔵がやってまいります、後には渡井庄兵がついて板の間の廊下に座り、福井重蔵は座敷に座ると話しをきり出します。

「この八開村の住人は、これで全員揃うたか」
弥平は後ろを見渡し

「お代官様、揃っております」

「それでは、ここに控えし渡井庄兵こと甲州屋庄兵より仔細を申し述べる故、心して聞かれよ」

庄兵は姿勢を正すと話し始めたので御座います。

「皆の衆、儂は甲州屋庄兵と申します。」

これからは野良仕事から皆を解き放つ話してござります。ここに在りしが燃え尽きる事の無き薪でござります」

庄兵は持参した風呂敷包みを解き、一尺立方に納められた桐の箱の蓋を開け頭上に翳します。

一寸大の黒い玉がガラスの瓶に入り青白く妖しい光を放っておりま
す、村人達はオオツとどよめきが起るのであります。名主弥平は
恐る恐る庄兵に尋ねます

「それが燃え尽きる事のない薪でござりますか」

庄兵は怪訝な表情をしている村人を眺めながら
「そうじゃ南蛮渡来の不思議な薪でござる、この薪は燃え尽きるだ
けでなく、子供をどんどん増やす事が出来る夢の薪、わが国の如く
資源乏しき土地には相応しい薪でござります」

更に続けます

「この薪によつて、夜は光を放ち冬は暖を採れるのでござります」
代官、福井は村人達にかくの如く云うのであります

「そこで弥平始め村の者には、いまの田畑をこの甲州屋に渡して貰う事になる」

村人は口々に騒ぎ出すので御座います

「おらー これから米作れなくなるだ」

「んだ んだ」

代官は両手を挙げ手の平を上下に揺らせながら

「静まれ静まれ、話しはこれからじゃ甲州屋この続きを述べよ」

「皆より譲り受けし折には、この薪の作業所で働いて頂きとうございます、さすれば田畑なくとも日々の糧は得られようと存知まする」
弥平が重ねて尋ねます

「本当にオラ達に仕事くれるだか」

重蔵は嵩^{かさ}に懸けて言い放ちます

「控え居れこれは幕府が命^{めい}である、時の將軍綱吉様は苟^{いやしく}も彼の東照大権現様の生まれ変わりなるぞ、言葉を慎めゝい」

ここで東照大権現とは徳川家康を指し神格化されております。お上には楯突かせない紋きりの台詞でございます、現代流に言い換えますと、

『役所は神様である何一つ官僚の行う事は間違は無い』
と、成るのでございますよ。

この時代農民の殆どは小作でございましたから、一部の大地主と話を付ければよろしんですが、余り史実に拘り過ぎますと進みませんのでこの所はご容赦願います。

村人達はこれには逆らません、一同平伏して代官屋敷から去って参ります。

甲州屋は弥平達が居なくなつた後、奥座敷と呼ばれます

「福井様、本日は有難うございまする、流石でございますね」

代官は脇息に肘を置き鷹揚に言うのであります。

「この位赤子の手を捻るより、所作も無いことよ」

甲州屋は用意してきた、包みを福井の前に差し出します、菓子折りの底に小判が並べてあります。

「甲州屋よく気が付くのう、こう云った時には、あれを言わねば成るまい」

「あれでございますね、それでは」

庄兵は突然歌い出すのでございます

「そばやの二階で」

思わず重蔵つられて

「そばや そばぐや、コラッ 何を申す、お主とセッションして何とする」

「これは、御免くださりませ、では今一つの箱を納め下さりませ」

庄兵は箱を出すのでございます。

「福井様 これこそ人に厳しく、自分に甘い代官様にお似合いの品と存知まする」

中味はとらやの羊羹でございます、重蔵ニヤリと笑みを浮かべ

「では甲州屋参るぞ、この読者がいつ出るかと待ちかねておる。」

「とらや お主も羊羹よのう」

「お代官様こそ、ふっふっふっ」

「庄兵、とらやの羊羹は紅あんが良いぞ、この次は茶屋で合いたいものよのう」

目の前に小指を立てる重蔵でございました。

第4話 東原伝衛門の屋敷

ここは東原伝右衛門の屋敷

甲州屋は江戸に帰って参りますと、東原伝右衛門の屋敷を訪れます。東原は柳沢吉保が配下の家臣でございます、吉保と申せば將軍綱吉の側用人として異例の出世を遂げた人物でございますね。

甲州屋は門番に取次ぎを申し出、通用口の木戸より躑躅の咲く庭の中、敷石を踏みながら奥座敷へ通されます。座って暫くしますと伝右衛門が入ってきます。

「これは東原様、此度は何かとお取り計らい頂き甲州屋この上無き喜びでございます」

「甲州屋挨拶はよい、それよりこれからの事を相談しようではないか」

「甲州屋に出来うる事は、何なりとお申し付け下さりませ」

伝右衛門は眉間に皺を寄せ話し始めます

「実はこの、薪の取締役をどの奉行が治めるが問われておるのじゃ」

「左様でございますね、出来得れば東原様の息のかかった人物にお願いしたい物でございますね」

「我が殿、吉保様が大老の席にお付になれば叶うであろうに。今の
大老、井伊殿お体優れぬ故近々役を辞するのじゃよ」

伝右衛門は庄兵の顔を下から覗き込み上目使いで言うのであります。

「東原様、委細承知致してございます、早速明日手代を寄越します
る。して老中様の数は如何ほどござりましょう」

「さすが甲州屋は物分りが良い、いかに上様の目に我が殿が叶うと
雖も老中皆で進言せねばのう、老中は殿を含めて六名じゃよ」

翌日、東原屋敷には荷馬車に積まれた千両箱が六個届けられたので
ございます。

ここで甲州屋なる人物像を申し上げますと。

元々は前述にあります大久保長安と同様、金堀職人ですが甲斐の国

にて水晶を掘り当て財を成したのでございます。柳沢吉保も甲斐武田の血筋でございますから、近付いて行ったのは極々自然でございますね。

苗字を許されたのも吉保の計らいでございます。

数日後、東原の屋敷に再び庄兵は呼び出されます。

部屋に入りますと既に伝右衛門は待機しております、今日は代官福井重蔵も同席して居るのでございます。

庄兵はお祝いの言葉を切り出します

「これは、これは此度は柳沢様大老のご就任おめでとうござりまする」

「甲州屋よう来てくれた、お主のお陰でのう殿は大任の責をお受けなされた、それだけではないぞ、まあ近う」

「と、おっしゃれますと」

庄兵は伝右衛門に一膝寄って行きます

「薪作業所の監察をいずれにするかが今後問題じゃ、慣例では南町奉行所になる、だが南町は堅物が多くて事が起きた時面倒じゃ、そこで薪奉行所を新たに設ける事をここに控えし福井が進言でな、某が殿に申し上げたのよ」

「なるほど流石、東原様でございますね。私共もそこを危惧していたのでございます、して如何様な」

「この薪奉行所に監察と免許を置くのでござる、喩えて申さば野球の審判が片チームの監督を兼ねるのでござる」

「おお其れなれば、心強うござりまする」

そこに重蔵が話しに入ります

「庄兵、東原殿は幕府学問所を首座で修めて居りこれからも？りになり申そう」

伝右衛門は破顔一笑しながら

「福井氏それは昔の事よ、それより甲州屋をよろしく指南されよ」

「では東原様は薪奉行として、今後私共と懇意にお願い申し上げます。御役が退任為され折には、薪作業所のお目付け役として御

迎え致したく存知まする」

「庄兵これからは世間の目もある故、福井氏を間に立てて望みを受けようぞ」

福井は伝右衛門に口元が緩んだ顔で、

「東原殿はこれで末代まで、ご安泰でござりますな。

我等は兄弟さんからの付き合いを致したいものですな」

「福井様これが真の談合だんご三兄弟でござりましょう」

「これ声が高いぞ」伝衛門は二人を制するのでございます。

三人の笑い声が聞こえてくる様でございます。

東原が部屋を出て行きますと、庄兵は重蔵に

「福井様、丁度今宵は隅田の花火祭でございます、如何でござりましょう」

「よく気が利くのう、してこちらの方はどうじゃ。三浦屋の揚巻なんぞ侍らせては」

「揚巻は売れっ子にて半年先まで予約が御座りますゆえ、鳴門巻、伊達巻では如何で御座りましょうか」

「なにか目の廻りそうな源氏名やのう」

「されば深川？1芸子の冷奴で如何で御座りましょう」

「なに冷奴とな、手が冷たそうな女御じゃな」

「いえ手の冷たい女御は情が暖かいと申します、それに肌は絹ぬいごし湯豆腐の如く温ぬくまらば、そうはもう」

「馬鹿申せ、絹ぬいごしは湯豆腐ではバラバラで食にくいわ」

「そこは御代官様にて程好う人肌に」

「程好く人肌とな、お主も言うのう」

「いいえ福井様ほどには」

こうして隅田川の花火舟に向かって行く二人で御座いました。

江戸花火大会が大きなイベントになりますのは、両国川開きにて享保18年（1733年）以後の事でございます。それは江戸中のり

クリエーションイベントとして、江戸湾の海底でも蛸、イカまで参加したそう。スミを吐きながら『たまやゝ、鍵やゝ』ならぬ『タコやゝ、いカやゝ』と周りの魚が言ったそう。

掛け声にも作法がございまして、打ち上がったから花火が消えるまで『たまやゝ』と叫び続けるのが江戸っ子の粋で御座いましたのですよ。

さてこの続きは次回にて

第5話 三浦屋 揚巻（前書き）

薪作業所も竣工し、東原伝右衛門、甲州屋は吉原へ参ります。

第5話 三浦屋 揚巻

斯くして薪奉行所は柳沢吉保の肝煎りで江戸城書院の中に設けられたのでございます。

甲州屋から上申された薪作業所の書面を吟味しております、役の中心は算術指南役、武田白雲が仕切っております。そこに指南役補佐、池田三之助が書面の問題点を白雲に報告致したのでございます。

「先生、この作業所は海辺に普請いたしますが、以前の記録を調べますれば、地震に対しての強さが足りませぬ」

白雲は三之助の地震記録を見ると

「確かに大きな津波の記録があるのう。だが三之助それは百年に一度あるか無いかであろう、問題はないぞ」

「しかし、若し起つたら何と致しましょう」

「その時は想定外と言って置けばよいのじゃ」

三之助は更に食い下がります。

「今一つ、事故が起つた際の火消組がござりませぬ」

「その時は江戸表より直参火消組ハイパーレスキューを送ると指南を付け加えておけば良いであるぞ」

「それまでに、この村は灰に埋もれてしまいます」

「村人は遠くへ逃げさせれば済むではないか」

「百姓が田畑を棄てるは、御法度でござります」

「それでは、百姓を火消しに駆り出せばよい」

「この灰を吸い込みますと、いずれ命を縮めます」

「よいか三之助よく聞け、お主は書面が揃つておる事だけ吟味すれば良いのじゃ、後の所は薪奉行様のご判断にお任せするのじゃぞ。」

薪御法度に記載なき事柄は、算術指南役が関わってはならぬ

三之助は、彼の時期かに起る災いを危惧しつつも、白雲の言葉に従わざるを得ないのでございます。

こうして薪作業所は完成の運びとなり、江戸の町、八開村ともに冬は暖かく夏は涼しくと我が世の春を謳歌したのでございます。

さてここは吉原、薪作業所が出来てからは文字通り不夜城となつてまいります。

東原と甲州屋は揃つてやつてまいります。吉原は皆様ご存知のとおり、幕府公認の公娼でございます、以前は各宿場の旅籠、茶店にて飯盛女と称する売春が公然と行なわれていたのでございますが、宿場の規制によりここ吉原が中心となつてまいります。

初期は日本橋、明暦の大火（1657年）以後は浅草に移転したのでございます。

二人は吉原一番の^{おおたな}大店三浦屋へ参ります、このクラスになりますと茶店つまり現在で申せば紹介所を通してしか入れないのでございます。言つてみれば高級会員制クラブでございます、そこは今、破竹の勢いの薪奉行と新興財閥甲州屋となれば顔パスでございますね。

伝右衛門のお目当ては勿論『太夫の揚巻』を指名して店の暖簾をくぐりますと、主人自らが迎えます。

「これは、これは東原様ようこそお越しただけました、本日あやにく、手前どもの太夫『揚巻』^{はやりやまい}流行病の熱に伏して降りますれば、天神の水巻がご案内致しまする」

ここで天神とは、この時代のランクで？2でございます、以下、切見世と続きまして最下位は二朱女郎と格付が成されております。太夫になりますと一晩十両でございますから一両五万円としますと女性の価値が高い時代でございます。伝右衛門は三浦屋に

「いや、それでは揚巻に見舞いを致そう、案内^{あない}せい」

遊郭の建屋は入口は道路側に一つあるだけ、四角の回廊の庭側に廊下を挟んで障子、庭の反対側は窓が無く壁になっており客、女郎が逃げ出せない造りでございます。

太夫の部屋に三人が入りますと、揚巻は床に伏し、傍らには禿^{かむろ}と称

す少女が花魁の手拭を変えております。禿とは頭の頂上付近を剃り丁度河童の髪型にて付き人として座っております、将来は太夫の予備軍として芸事の教育を受けているのでございます。廓は当時、芸能学校でもございましたですね、娼婦の数は女性90人に1人いたと記録に残っております、女郎は当時仕事のひとつと成っていたのでございます。

揚巻は伝右衛門を見て、床から起き上がります。

「ああ殿様、この様なお見苦しい姿で申し分けないであります」

「太夫、気にせぬとよい、お主の顔を見に來ただけじゃ」

「殿のお噂 かねがねと 揚巻聞いて あります」

逢瀬なきゆえ この身にて 今日か明日かと 待ち詫びぬ

されば文など したためて 殿の元へと 送らんと

今ただ 書きしるしたであります」

流石、太夫ともなると教養、男の垂らしこみ一級品でございます。

伝右衛門鼻の下が伸びてまいります

「そうか、それほど拙者を慕うてか、さて其の文読んでくれぬか」

揚巻、巻き手紙を硯箱から取り出しますと

「あたしや あんさんに 愛うえお

そして文なぞ 書きくけこ

いやなら剣kenで 刺しすせそ

そして命を 断ちつてと」

「おおこれは怖い、命が掛かって居るぞ」

「揚巻、伝さまに首つ丈であります」

「何とか 病を治さねばのう」

そこに、花売りが通りに参りまして

「えー花屋でござい、どんな病も花にてなおす

耳の病に 聞くきこ（菊）の花

皮膚の荒れには 百日紅ひゃくすべり

お医者さまでも 草津の湯でも

治らぬ病を 花にて治す えー花屋でござい」

売り声がここ三浦屋でも響いたのでございます。甲州屋は早速、

「東原様、おおこれはいい所でございます、花売りを呼びましようぞ」

花売りが入り口で待つております、庄兵は

「どんな病も治ると申すか」

「へい、神仏に誓つてこれは間違いございません」

「もし、ここの太夫に効き目があらば、全部其の花貰い受けようぞ」

「で、太夫の様子はどんなんで、熱で伏して、あーそれでございますしたら此花でよござんしょう、根を擦つてお飲み下され」

花屋は球根の花を渡します、それを揚巻嚼ると

あら不思議、たちまち熱が下がったのでございます。

甲州屋は花屋に尋ねます。

「この花の名は何と申す」

「へい 花魁おいらんの熱だけにヒヤシンス」

まだまだ、つづきます

第5話 三浦屋 揚巻（後書き）

既に読者の方は、薪が何かをお分かりでしょうが、薪も花魁の熱も冷やすが肝要です。

第6話 栄耀栄華の裏（前書き）

薪作業所に原因不明の病で倒れる村人、その時代官と甲州屋は

第6話 栄耀栄華の裏

今日もお越し頂きありがとうございます、

祇園精舎の鐘の声

諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色

盛者必衰の理をあらわす

おごれる人も久しからず

ただ春の夜の夢のごとし

たけき者もついには滅びぬ

偏に風の前の塵に同じ

これは平家物語の有名な冒頭でございます、

薪作業所も順風満帆に行くかと10年ほど経ちました時の事でございます。薪作業所に仕事に行った村人は原因不明の病に倒れてまいります。

代官所に村人が訴えを申し出ますが、代官福井重蔵は一切取り合いません。それどころか事故死と記録をしたのでございます。

甲州屋庄兵は代官所に呼び出され、いつもの奥座敷へ参ります。

「これはこれはお代官様、此度は何かとお取り計らい奉りありがとうございます御座いまする」

「甲州屋、小癪にも村人が訴えよった。作業所が元で死者を出しては幕府の威光に関わるよってな、事故死として薪奉行所には伝え置いたぞ。庄兵それでな百姓には多少の心付けを渡して置けば良いのじゃ」

重蔵は鷹揚に甲州屋へ言い渡すので御座います。

「代官様のお取り計らい、甲州屋恐れ入ります」

庄兵は菓子箱を差し出し

「これを奥方様に差し上げとう御座いまする」

「おう、これは長崎の菓子でござるな」

「さようで御座います、福砂屋のカステーラと申しそれはもう舌が蕩ける程でござります」

「カステーラは文明堂ではないか、歌にもあろうぞカステーラ一番電話は二番とな」

「長崎ではこの店でございます、それと福砂屋から一番の菓子職人を連れてございます」

「なに、このカステラを食すに職人が要るとな」

「カステラは下に敷かれし紙が、口に入りますると難儀を致しまする、そこで御公儀介錯人『山田浅右衛門』一族の山田 鹿花士之助かしのすけと申す必殺調理人を共に参らせて御座います」

山田浅右衛門は死刑執行人で御座いまして、首の皮一枚残し介錯したと云われております。武士が切腹する際三方を尻に敷くのは介錯した後、頭部と離れた体は後方へ反り返るのを防ぐ為で御座います。さらに首の皮一枚残す浅右衛門の技は切腹武士を前方へ倒し見事な最期を遂げさせるので御座います。武士以外の斬首刑に肩と腕を二人で押させるのも反り返りが有るからなんで御座います。

若し押さえが無いと、円を描き後ろへ倒れながら血飛沫がそれこそ噴水の様に散ったので御座いますね。

「山田 鹿花士之助とは何か田圃に居そうな名じゃのう」

「先ずは腕前ご覧下さりませ、これこちらへ参れ」

庭先に鹿花士之助が参ります、廊下に三方を置きカステラが一本載せております。

「それでは、失礼つかまります。いざ御免」

と言うや三方を手にしカステラを空高く投げ上げ、腰に差した小太刀を引き抜くと、ツバメ返しが如く剣が舞ったので御座います。落ちてきたカステラは一本の儘、再び三方の上に戻ります。

甲州屋は鹿花士之助から三方を受取り

「福井様これをお召し上がり下さりませ」

「庄兵、何も変わっておらぬではないか」

「いえ、見事切れております」

福井は一つ取って見ると、紙一枚残して八片に為っております。

「これは見事である」

「福井様全て食され、紙に付いた甘き蜜は指にてなぞれば、それはもう女御おなごの蜜が如きで御座います」

「何と申すか女御の蜜とな、お主もやるのう」

「いえ、お代官様こそ」

村人を騙した代官、甲州屋に天罰が来るのは、もはや時間の問題であることを二人はよもや知る由も無いのでございます。

つづく

第7話 延命（前書き）

薪作業所の延命を図る甲州屋は

第7話 延命

薪作業所も10年の月日が経ち、薪釜も寿命の時期が参りまして甲州屋は幕府に修理で延命を図らんと画策し、東原伝右衛門の屋敷に足を運ぶので御座います。

庄兵は何時もの様に奥座敷に通させれます。

「これは東原様には、お世話になっております。此度は薪作業所の修理について殿様のお知恵を拝借頂きたく参じた次第で御座います」

「そうじゃの甲州屋あれから10年余り、幕府の薪ご法度では釜を新しくせねばならぬのう」

「そこで修理にて未だ使うに耐えうるとお墨付きを戴けないかと、お知恵を頂き等ございます」

「わが殿、柳沢吉保様も既に大老職を辞され隠居されてござる、近く大岡忠相なる人物が奉行になる知らせを受けておる。あの男は將軍家より信任厚く尚且つ庶民に肩入れしよる、中々の食わせ者ゆえ心して掛からぬとな」

「そう致しますと、薪奉行所の行方は如何なりでござりましょうか」

「恐らく南町奉行所に属する事になろうぞ」

「それでは、作業所の運命も薪ご法度の通りなるやもしれませぬな、東原様を作業所相談役としてお迎え申し上げたら如何なりでしょう」

「そこでじゃ、算術指南役の武田白雲は身分そのままゆえ作業所が修理に耐えうると上申させれば良いではないか」

「流石お殿様、甲州屋心強うございます、これは京都緑壽庵の金平糖でございます」

金平糖だけに箱の底には金色が妖しく輝くので御座います。

「あの大岡も越前でなく、H膳であれば話し早いじゃが何かと苦勞が付きまとうのう」

「そこは東原様の裁量をお願い申し上げます」

「代官福井にも申し伝えて置く故、改修の上申書は手ばかり無きように心せよ」

「ご指南有難うございます」

かくして代官所に書面を届けに行く甲州屋で御座いました。

さてここは代官屋敷、甲州屋はお目どおりを願います。

「これは福井様、かねてより作業所の改修の書状を

お受け取りのお願いに上がりまして御座います」

「どれ検分致そうぞ」

代官は書かれた改修目録を眺めて

「甲州屋これでは幕府の許可は得られぬぞ」

「はて、何か不首尾でもござりましょうか」

「算術役よりの指南書を用意しておる、これに合うよう書き直して参れ、これ近う」

福井は門外不出の内部指南書を甲州屋に見せるのであります。庄兵衛わずニンマリと

「おおつ、これを拝見頂ければ有り難き事でございます」

出来レースでございますから、難なく改修許可は下りて参ります。

甲州屋は代官を川沿い茶屋へ案内します

「福井様、今宵は離れに金髪美女を呼んで御座います故ごゆるりとお過ごし為されませ」

「何金髪とは、あの伊達正宗公が大名の中で始めて側室にした、あの金髪か」

「左様で御座いまする、名をナイチンゲールと申し、それはもう驚の様な鳴き声を上げまする」

「言葉は通じるのか」

「それはもう、お代官様そちらに言葉は不要で御座いまする」

甲州屋は手を叩きます、金髪で和装の女性が入って参ります。庄兵衛は部屋を辞し福井は話しかけます

「おお、初いやつ名をなんと申す、泣き声を聞いて見たいのう」

「ナイチンガールと申します」

二人は床に入り、福井の手が下半身に当たるや何やら潜水艦は潜望鏡の様な物を掴んでしまうので御座います。

「ななつ何だ、これはどうした事じゃ」

ナイチンガールと称した人物はパツと跳ね起き、隠し持ったあいくちヒ首を代官の喉元へ突き付けます。

「ヤイエロ代官、お前らの企み聴かせて貰ったぜ、他言されたくないや百両出しな」

「おつ、お前は何者」

「知らざあ言つて聞かせやしょう　浜の真砂と五右衛門が歌に残せし盗人の、種は尽きねえ七里ヶ浜、その白浪の夜働き、以前を言やあ江ノ島で、年季勤めの稚児が淵、百味講で散らす時き錢をあてに小皿の一文字、百が二百と賽錢のくすね錢せえ段々に、悪事はのぼる上の宮、岩本院で講中の、枕捜しも度重なり、お手長講と札付きに、とうとう島を追い出され、それから若衆の美人局、ここやかしこの寺島で、小耳に聞いた爺さんの、似ぬ声色でこゆすりたかり名せえゆかりの弁天小僧菊之助たあ俺がことだあ！」

「お前が弁天小僧とな」

「そうよ、よく聞きな驚は雄しか鳴かねんだよ、百両頂くぜ、あばよ」

弁天小僧は風のように去って行くのであります、福井は

「誰か居らぬか、甲州屋」

「お代官様いかが致しまして御座りまする」

仔細を聞いた庄兵は、手代を呼びつけ

「何という不始末、どう云う事じゃ、ナイチンゲールではないのか」手代は「私めはナイチンガールとお聞きして御座います」

代官福井が堪らず

「ばか者、ナイチンゲールでもナイチンガールでも無いわ、アルチ○ボーイじゃ」

つづく

第7話 延命（後書き）

弁天小僧の謂れ

弁天は女性陰部の隠語それに小僧がついて、現代ならニューハーフ。因みにニューハーフのお姉さま？方の言葉が、ややべらんめー調はこの弁天小僧の台詞に有ると筆者は考えます。どうでもいい事です
が（笑）

弁天小僧の台詞に江戸の地名が掛けて有ります、その数は7箇所探してみませんか。

第8話 天の怒り（前書き）

修理をした薪作業所が罹災事故をおこし、その時甲州屋、東原伝右衛門は取り繕いに奔走します。

第8話 天の怒り

薪作業所の延命工事も終わり半年過ぎた頃、八開村に大風が吹き荒れ作業所が火事になってしまい薪を覆っていた釜から大量の灰が空に舞い上がります。

今は作業所の長となつた名主の弥平が東原に訴えるのでございます。

「お殿様、これは村の火消組では手に負えませぬ」

「はて手に負えぬとは、如何なる事や」

「薪は冷やし続けなければ大爆発を致します、冷やすための術が壊れております」

「この作業所は修理し終えたばかりじゃ何とかならぬか」

「申し上げます炉の取壊しと命を下さりませ、されば一月以内に封じ込めて見せます」

「それはならぬ、幕府にも事故は起こらぬと申してある、これは町民、村民にも周知の事であるゆえ全力を挙げて再び使用できるようにせよ」

東原は幕府に未曾有の天災と報告し直参火消組を要請するも事の重大さを認なかったのでございます。

弥平等は釜の中の薪は溶け出しているにも拘らず、無駄な事と知りつつ薪釜を海水で冷やしております。これは大岡様へ事の次第を直訴せねばと作業している村人に背中を押され江戸に旅立つのでございます。かくして火災報告は南町奉行大岡忠相の耳にも入り大岡は時の老中、阿寒大老あかんに取り壊しを注進致したのでございます。しかし算術指南役、武田白雲は東原からの報告を言上し大老始め幕閣は大岡の進言を抹殺してしまいます、これが灰の拡散を広げ事故收拾を遅らせる事に為るのでございます。

阿寒大老が厚生目付の事でございます、〇157事件に於きまして元凶をカイワレ大根と決め付け農民は風評被害により憂き目を見、

それを防ぐにかのカイワレを食す事を為すも一度表沙汰と成れば難しゅうございます。

さらに自身の年金未納問題が発覚し、愚かにも四国巡礼行脚で反省と恭順を致すのでございますが、骨ある奉行ならば

「厚生奉行であつた某^{それがし}さえ分からぬ年金御法度に難がある」と、この法度の改正を奏上するが筋と云う物でございます。

巡礼では何と申して行脚したので御座いましょう。

「巡礼にごほうしゃ」だけに放射線で苦勞しております。

庶民は奉仕で放射線（ほうしせむ）でございますよ。

弥平が南町奉行所へ直訴の件は代官福井の耳にも入り重蔵は甲州屋を呼び付けるので御座います。

「甲州屋お主も知つて居ろうが弥平が畏れ多くも大岡へ薪作業所の件で直訴しよつた、幸いにも東原殿の後押しで取り壊しは免れたが農民の直訴は御法度により磔である。これだけで罰する事は出来ようが、それが為に諸々の所業が表に出るが危惧されよう甲州屋庄兵の責に於かれて弥平を仕置しては如何かな」

「福井様此度の事、真持つてこの庄兵が手落ちで御座りまする、当方にて代官様の意に沿うよう取り計りますゆえお任せ下さいませ」

甲州屋は作業所へ帰りますと手代に命じます。

「弥平が事で代官様より叱責を受けた、こ奴を始末せい但し刃物は使つてはならぬ」

手代は博奕打ち三人を集め弥平の帰り道の林に待ち伏せるので御座います。手代は弥平を呼び止め

「弥平殿、毎日の火消し作業ご苦勞様でございます」

「これは手代様、これもお世話になつてゐる甲州屋様の為、当然でございます」

「ご主人様がお手前を勞うよう申されてな、この先の茶屋に案内致しようぞ」

「いえ折角のお言葉ながら明日も夜明けより仲間と火消しに当たり

ますゆえ、一段落してからで宜しゅう御座います」

手代の眼がギラリと光り

「そうは参らぬ、今宵で無ければならぬのじゃ」

手代が集めた三人が弥平を囲み押し倒し、鼻をつまみ酒を口へ淹のように流したので御座います。

「て、手代様お助け下さりませ、ゴホツゴホツ」

弥平は咳き込みながら氣を失い、翌日弥平は川で死体となって村役人によって発見されます。

検分では泥酔により誤って川に落ち溺死と代官所に報告されたので御座います。

代官所の門前に書状を手にした一人の女が立ち叫んでおります。

「申し上げます弥平が女房で御座います。弥平は酒を飲みませぬ、今一度お取調べを今一度お取調べをお願いで御座ります」

つづく

第9話 水戸の老公（前書き）

代官所で酷い仕打ちを受けた、弥平の女房の前に三人の旅姿の一行がやって来ます。

第9話 水戸の老公

代官所の門番が福井に弥平の女房を報告します。

「何、その様なことを訴え出るとな庭へ通せ」

女房は庭の砂利に座り、改めて願います

「お代官様、今ひとつお取調べをお願い申し上げます」

「弥平が女房、この代官の取調べが不服とな、ここを何だと承知の上での訴えか、50叩きにして追い出せ」

女房は牢の前で手首を縛られ、宙吊りとなり竹刀で打擲され拳句の果てには、下役人のより手籠めにされてしまったの御座います。

「出て行きやがれ、この尼、福井様に舐めた口聞きやがるからこのざまだ」

門から蹴り出されしみます、女房は半狂乱になり髪、着物の裾を振り乱してよろめきながら歩いております。

「わしらは、虫けら お上に慈悲は なかんせよ、お上は生きてもわしらは 死んでもええ」

そこに三人の旅姿の一行がやって来たので御座います。

一人は杖を手に髭を蓄えた老人、二人の助さん格さんと名乗るいなせな若衆を連れております。老人は女房を見るや

「これ助さん、あの女房尋常ではないぞ尋ねてまいれ」

「これ女房殿如何なされた」

助さんは抱きかかえます、弥平の女房は事の仔細を訴えます、格さんが言つたので御座います。

「女房殿ご安心めされよ、我等が力になろうぞ」

「助さん、格さんまずこの弥平やらの家まで送ろうかの」

女房の脇を抱え歩き出しますと一人の編笠の侍が、矢立を取り時々土を掴んで書き物しております。老人は尋ねたのでございます。

「その武家殿、何をしているんじゃ」

「薪作業所が火事になり、そこから舞い上がった灰を調べて居りま

する」

武士は白雲に睨まれ幕府から追い出された算術指南役の池田三之助でございます。

「ほー、してこの灰が如何なる事を引き起こすのじゃ」

「これを吸い込み続けますと、いずれ不治の病となるので御座います」

三之助は江戸を追われた後長崎で医学を学び、後世で癌と呼ばれる治療法を研究しております。

「それは丁度良い所で出逢うた、わし等も火事の件でこの地を訪れたところじゃ、してお手前の名を聞かして呉れぬか」

「池田三之助と申します、この病を治す医学を学び長崎より参りましてございます」

「遙々（はるばる）長崎とな、三之助とやら此処であつたのも他生の縁、わしと一緒に来て呉れぬか」

「して、あなた様はどのような方で御座いましょう」

「ただの物好きな爺でござるよ、怪しい物ではござらぬ」

「ご老公、先ずは弥平が女房を家まで送りせぬと」

助さんが促します、三之助は女房を見るや

「これはひどい怪我をしております、拙者が治療いたしましょう」

弥平の家で治療しながら三之助は

「ご老公様、これはひどい仕打ちを受けておりまする、骨が三箇所折られ、尚且つ陵辱まで受けて御座います」

「何の咎無き民衆をここまで仕打ちとは、助さん格さん、何とかせねばならぬのう」

「ご老公、御意で御座ります」

二人は異口同音に応えたのでございます。

この三人は、助さん格さん不拡散条約をもとに、あー言え^{あーいえ こういえ}こう言う、こう言え^{あーいえ こういえ}あー言う IAEAの指令を承け密かに調査に来ていたのでございます。IAEAの査察を通常なら即時に各国とも受

け入れるので御座いますが、阿寒幕府は30日余り拒否し続けたので御座います、この事はIAEAとしても前代未聞のことです。

「して三之助この村での民衆の災いの大きさは如何ほどじゃな」

「薪作業所より15里（60km）の距離にて通常の20倍から120倍の灰が降っております25里（100km）でも3倍でございます」

「して、人への影響は如何なるほどのう」

「一番には幼子おきなごにガンが罹りまする、その発症率は隣国オソロシアの事故に拠りますと、事故前は100万人に0・1人が事故後は10万人に12人となっておりまする、しかし甲状腺ガンの例の話で御座いまして、元服（15歳）以前の子で健康な子は2割しかないでございます、これも灰に汚染された牛乳を長期食したもので御座います」

「して治す方法は、如何じゃな」

「取り敢えずは、りんごが解毒作用を致しまする、防ぐは瓦版にて書かれたヨード剤に効能が見られますが、事故後48時間以内で御座りませんと効能は無いので御座います」

「今、問題のセシウム137は如何なるものや」

「セシウム137の物理的半減期は30・2年で、人の中で実際に減少していく生物学的半減期は100〜110日でございます。さらに、新陳代謝の活発な乳児は、大人の5分の1の期間で放射線量が減少して参るので御座います」

「出回るを停止している、野菜、肉については如何なる所見をお持ちじゃ」

「路地野菜は場所により危のう御座いますが、ハウス栽培までの制限はやりすぎかと、洗う、皮をむく、塩水につける、熱を通す、煮汁を捨てるの処置で十分の一まで落ちまする」

「何ゆえ、この灰は人に影響するのじゃな」

「この灰の放射能と呼ばれる粒子が人のDNAを傷つけるので御座

います、これが癌の原因となります、さりながら、人はこれだけでは癌になりませぬ。生活習慣、合成食品、化学物質、電磁波と引き金はたくさん御座ります、寿命が長くなる分癌に罹る率は？えるので御座います。放射能は浴びる量によりDNAの破壊は凄まじい物がござります」

「それだけ危険な事なれば、早く治療せねばならぬのう」

「このような急激な発生は治療法はござりませぬ、これから受ける灰の影響は、民衆の健康なDNAとIPSと呼ばれ幹細胞を保存し、いずれかの時期に発症した折治療できるよう、研究開発をしておくが肝要で御座ります」

「なに治療法はないとな、発症までどの位の時間があるのじゃな」

「これは、数年後から20数年後で御座りますゆえ、先ほど申し上げた対処が賢明かと存じます」

弥平の女房が老公にお願いしたので御座います。

「ご老公様、何卒この八開村と弥平の難儀をお聞き届けてくださりませ」

つづく

第9話 水戸の老公（後書き）

参考文献

- 1 アメリカの原爆障害調査委員会
- 2 チェルノブイリの惨状を知る被曝治療の権威、ロバート・ゲイ
ル博士の談話
- 3 フランスのNGO、CRIIRAD（Commission
de Recherche et d'Information
Indépendantes sur la Radioacti-
vité?、放射能に関する独立研究情報委員会）

第10話 水戸の老公2（前書き）

弥平の女房は、老公に訴えた後息を引き取ります。弥平にはお七と云う名の子供がいました。

第10話 水戸の老公2

弥平の女房は老公に訴えた後、息耐えてしまったので御座います。その様子を障子の隙間から見ていた子供がいました、戸を開けなかり開けると亡骸に縋りついたので御座います。13歳になろうか利発そうな少女でございました。

「かか様、かか様」老公は子供に尋ねます。

「これ、お前は弥平が子であろうか、名を何と申す」
涙で顔をクシヤクシヤにしながら

「あい、お七と申します」

「お七、身寄りはおらぬか」

「居りませぬ、とと様があのような事になってより、誰も相手にしてくれませぬ」

「そうか、助さん如何が致そうぞ」その時三之助が

「ご老公、口を差し出して申し訳御座りませぬが、この三之助にお預け下さりませぬか、この村の調査には一人でも手が要りまする」

「お七、お主はどうじゃ」

「あい、とと様かか様の濡れ衣を晴らせる事なら、お連れ下さりませ」

「この様な、いたいけな子まで辛い思いをさせる薪作業所は由々しき事態であるぞ、助さん格さん心して掛かろうぞ」

「ご老公、御意でございます」

その頃代官屋敷では、甲州屋と代官福井が額を突き合わせて何やらひそひそと話をしております。

「甲州屋、何やら翁と男二人の三人組がこの薪作業所を嗅ぎ回っておる、お主は誰か分るか」

「お代官様、もしかあの水戸の老公やもしれませぬ」

「なにつ水戸の老公とな、イザとなると必ず」

『この陰囊が目に入らぬか』と啖呵を切る輩じゃ」

「福井様、陰囊ではございませぬ、印籠でございます。合わせてこの紋所が目に入らぬか」でございます」

「そうか、コーモンだけに陰囊かと、紋所は女御の悶所ならワシはよく知っておるぞ」

どうにもこの二人、穴の開いた柄杓で御座います。すくい様がない。

「もしもあの大岡めが出て参りましたら、如何致しましょう」

「わし等は下からの報告を聞いていなかった、であるな」

「確かに、聞いておりませぬ」

「そうよ土分は醜聞が出る度、秘書が秘書がと言いつくしよる、秘書という者は息のかかった座より内々事を持ちかけられるであらう、それはヒシヨヒシヨ話、其れゆえ秘書と謂うのであるぞ」

「流石お代官様、土分は民衆の代弁者でなく講、座の手先で御座います」

「ここだけの話じゃが、琉球の辺野古には民衆組の大物土分が土地の買占めをしておると噂であるぞ」

「成る程それゆえ、あの件では表舞台に上らないので御座いますな」

「シーツ声が高い、誰が聞いて居るかもわからぬ」

「それと福井様、怪しげな浪人が矢立を手に、作業所の周りの土を調べている様で御座います」

「左様か、早速配下の者を使わそうぞ、安堵されよ」

「よろしゅうお取り計りくださりませ、いずれ江戸は深川辺りの茶屋を案内つかまつります」
あない

因みに町奉行は町人、無頼の輩、無宿人を取り締まり、武士は目付が担当するので御座います、この目付現在の立法、司法の権限がございまず、時には行政まで口を挟む事も御座いましたので、大老といえども目付が首を縦に振らないと事が進まない事もあったので御座います。

何か現在の状況と似ております、それもその筈徳川幕府が倒れた後、長州藩に日本の法案作成および執行の人材が御座いません。その時明治政府は幕府の所謂、官僚組織を残したので御座います、それは太平洋戦争後もGHQに引き継がれます。これだけの歴史が御座いますから、霞ヶ関が伏魔殿と云われる所以でございますね。ここに棲息する人々の特技意外と知られてませんが、川柳、和歌、短歌が得意なので御座います、て・に・を・は、の使い方が上手い、それを世間では霞ヶ関文法と云われます。法案を巧みに骨抜きへの書き換えに長ける事、それはそれは天下一品で御座いますよ。

さて、薪作業所の外で三之助とお七が土を調べておりますと、代官福井に配下の者が近付いて参ります。

「オイ、お主ここで何をしておる、手形を見せよ」

「拙者は幕府算術指南役組、池田三之助と申す。怪しい者ではござらぬ」

「いい加減な事を申せ、さつさと代官所へコイツ」

村役人は三之助を後ろ手に締上げ代官所へ曳き摺って連れ去るので御座います。

隣にいたお七は前に廻り土下座をすると、

「お役人様、先生は何も悪い事はしておりませぬ、ご容赦を、お許しくださいんせ」

「やかましい、お前のようなガキの出る幕ではないわ」

お七は足蹴にされ飛ばされたのでございます。お七は途方にくれながら水戸の老公の許へ走ります。

息を切らせながら、三之助の編み笠を手にし

「ご老公様大変で御座います、先生が代官所へ連れて行かれました」

「何とこれは由々しき事、助さん格さん参ろうぞ」

「御意」

u u u
^ u u

第11話 代官所（前書き）

老公一行は代官所に向かうも、立ち塞がる博奕打、代官役人に対し
助さん格さんの戦法は

第11話 代官所

老公達が代官所の近くに参りますと、博奕打らしき三人が道を塞ぎます。弥平を殺めた連中で御座います。

「ヤイその旅連れここを通して欲しけりや、懷の物置いてきな」老公は

「どなたか知らぬが儂等は先を急ぐゆえ、退いて下さらぬか」

「何をつべこべ抜かす、言う事聞けなきやこれが目に入らぬか」

匕首を抜いて、一行にギリツギリツ近付いて参ります。

「仕方が有りませぬな、格さんお相手してあげなさい」

「ご老公、ここは拙者にお任せを」

格さん何を思つたか懷から百両取り出し、三人組の前でばら撒いたので御座います。

「こりや話が早いぜ」

博奕打はミレーの落穂拾い宜しく、地面に落ちた小判を拾い出したので御座います。その隙に格さん三人組の後頭部を手刀で思いきり叩き、瞬く間に氣絶し倒れてしまい素早く紐で縛り上げます。老公は

「格さん見事でござる、してこの新しい兵法は何と云う名じゃ」

「恐れ入ります、これを格兵器と申します」

代官所の門前に三人組を引き連れて、格さんが番役人に口上を述べます。

「無宿人を引き渡しに参つた、代官殿にお目通り願おう」

門番は慌てて代官の許へ走ります、白州には三之助が後ろ手に縛られ座っております。

「何、まだこ奴の取調べ中じゃ、無宿人を預かつて追い返せ」

「そうは参らぬ」

門番の後ろから老公は付いて来たので御座います。

「狼藉者、皆取り押さえろ」

代官福井は命を發します、捕り手が一行を囲みますと

「ご老公ここは拙者にお任せを」

今度は助さんが応え、何やら紙を庭一面に撒いたので御座います。役人はそれを見るや、へなへなと腰が碎けその場でへたり込んでしまします。

「助さん見事であるぞ、天晴れ至極。してその刷り物は如何なる物や」

「ハッ、これは裏浮世絵つまり春画でございます、ここにマタタビの香を滲み込ませてございます」

「はて、捕り手、岡引は犬ではないのか」

「御意、役人は下々の者に対しては嗅ぎ回る犬で御座いますが、上役には猫になります」

「成る程のう、して助さんこの兵法は何と申すのじゃ」

「SKB48別名、助平^{スケベ}四十八手でございます」

老公はその一枚を手にして

「だがのう、この体位は無理じゃぞ」

格さんが老公に進言致します。

「ご老公、そろそろあれを述べませんとご威光が」

「そうじゃった、そうじゃった」

代官福井の目尻も垂れ下がり、浮世絵に釘付けになっております。

「者共控えい、控えい、この陰囊いや元い紋所が目に入らぬか、この方は天下の副將軍徳川水戸光圀公であられるぞ、頭が高い」

もとより控えた儘になっておりますので、ここはいささか拍子抜けで御座います。

光圀は福井に

「代官福井、お主は池田三之助を捕らえたであろう、何の咎であるぞ」

「はっ、無宿の浪人で御座います」

老公はお七より編み笠を受取り、裏を見せながら

「お主はそれでも代官か、この編み笠を見よ。ここに幕府算術指南

組 池田三之助と書いてあろう」

この時代諸国を通行には手形が必要でしたが途中窃盗にあつたり落としたりしましたので、江戸初期は厳しかったので御座いますが中期以降武士は編み笠の種類で手形の代わりになり、そこに所属藩が書いてあれば宜しいのでございます。

「これはこれは、ご老公様ご無礼のほど平にご容赦を、こら何をしている、その御仁の縄を解き放せ」

奥から甲州屋が出て参ります、尋常ならぬ様子を見るや慌てて正座をし平伏します、光圀は

「これ甲州屋、あいや渡井庄兵久しぶりじゃのう」

「ご老公にあらましては、益々ご健勝の事お慶び申し上げます」

「お主もあの柳沢に取り入ってから中々の者じゃな、だが最早これまで、潔く観念せい」

庄兵は背中を廻した脇差を抜き光圀に斬りかかりますが、老公の杖が手首を碎き刀を叩き落すと甲州屋はその場に蹲うつすくってしまうので御座います。

「愚か者、まだお主ごときに殺られるほど衰えておらぬわ」

その時、代官所の門から陣笠の武士を先頭に捕り手の軍団が入ってまいります。

「ご老公様ご無事でござりますか、南町奉行大岡ただ今参上仕りました」

「おう越前遅いぞ、こ奴らを？みましたぞ」

「甲州屋庄兵、八開村代官福井重蔵、上意により召し捕える」

高々と上と書かれた書状を掲げた越前守で御座います。

と、語って参りましたが実際は与力、同心が捕縛に参り奉行は奉行所を出ることは無いので御座いますよ。

さてこの続きは次回という事で、お後が宜しいように

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1268t/>

江戸小唄 越後屋

2011年10月6日07時58分発行